

初めての子どもたちの出発

松 藤 章 子

この四月から四歳児三十三人を担任し、一学期の三ヶ月間を夢中で過ごしてきた。子どもたちと共に生活することを通して人生を二度楽しめたいなあ。もう過ぎ去った、或いは知っていると思いついて、世界を再発見していきたくないなあ。……と、そんな期待を胸に、人生のスタートを生きている子どもたちに、幼稚園ってわくわくするくらい楽しかったと暖かく心に残るような一時期を、過ごさせてあげたい、……などという夢を描きながら、私の幼稚園生活は始まったのである。残念ながら現実には、発見や感動の心をどこかに置き忘れていたと思えるほど、とても余裕のない三ヶ月であったのだが、小さい子どもたちが、もうそれぞれの問題にぶつかりながら精一杯生きているということに、驚かされ、悩みもし、そして保育という仕事の難しさ、奥深さを予感した三ヶ月であった。今、一学期の保育記録を読み返しながら、気になっている子ども一人であるI男の変化と彼のぶつかっている問題について、考えてみようと思う。

。四月十七日（水）

気持ちの良い朝だった。子どもたちもすぐ外に飛び出して行った。その中で、I男がむずかしい顔をして、部屋の中で本を読んでいる。

幼稚園が始まって間もない、雨の翌日の気持ちの良い朝、子どもたちは挨拶をするとすぐに外に飛び出して行き、室内ががらんとしている日があった。何人かは部屋に残っていたのだが、なかでも、自分の中に閉じ込もっているように本を読んでいるI男の姿が、私は気になった。I男はこの四月に他の幼稚園から入園してきた子である。いつも保育後に何も思い出せないほど、ほとんど印象がなかったのだが、この日、いつもは私に向かって来ていた子どもたちがいなくなった時に初めて、対照的な彼の姿が飛び込んできたのである。同じ日、トイレの場所をもう一度教える為にI男と手をつなぐうとした時、彼は手を引っ込めた。その動作から私は、入園式の日心に引かかった一人の男の子を思い出した。椅子に腰かけてもらおうとして、子どもたちの後ろから「さあさあ」と肩に触った時、一人だけびっくりしたように振り払った子がいた。無意識にこういうしぐさをした男の子……あっ、あれがI男だったと突然思い出したのである。そして私は、まだ何であるかはわからないが、彼が今、何か問題を抱えていそうだということを、遅ればせながら感じたのである。

。四月十八日（木）

I男がダイナミックに絵を描いた。かなりの時間、夢中で描いていた。私に大きな画用紙を求めて、マジックを使っているか尋ねて、絵を描く場所をさがして、腰かけて集中していた。

この日、I男の描いた怪物か何かの絵が、線の力強い素晴らしい絵だったので、私はおとなしそうにみえる彼の持っているエネルギーに気づき、驚いた。そして、彼が幼稚園で遊ぶことを拒否しているかのように思っていた私は、長い時間集中して取り組んでいる彼の姿に安堵し、私に初めてしっかりと話しかけてきたことが大変嬉しかった。その翌日も翌々日も、さらに何枚も絵を描いて帰ったので、一人でかなり充実した時を過ごしていたのだと思う。だが、何よりも絵が描きたくて画用紙に向かっていたというよりは、三々五々遊び始めた子どもたちの中で、自分だけが入りそびれているように感じながら、彼は画用紙とマジックを手を取ったのではないかと、私には思われた。一人残ってしまった―自ら残っているように見える―時は、困惑した表情でウロウロしているI男の姿を、このころからよく見かけた。また、同じ組の子たちの中で、楽しそうに駆け回っている姿も時々目にした。だが、彼の遊び方をよく見もせず、彼の楽しそうな表情だけで安心してしまっていた自分を、今思うと反省する。なぜなら、混ざって楽しそうな表情をしていたというだけでは、友達と交流しながら楽しく遊んでいたかどうかはわからないのである。ただ、友達の方に気持ちがかかっているということだけは、確かめられる。

。五月二十一日（火）

I男が髪を短く切って登園。S男が目ざとく「おじいさんみたい」と言う。すぐに「涼しそうで、それに似合っていて先生好きよ。」と言ってみたが、近くにいた男の子たちはS男の表現に触発されて、からかい始める。H男は、笑いながら体ごと押していく。I男は表情が固くなってきて、自分の頬や手をつかんだり、手を出すまいとこらえているかのように両腕を体の前で交差させながら、H男を押し返していた。無理に引き離れたが、I男の息づかいがとても荒かった。I男は、一言も話さない。（……S男が泣きながら訴えに来てわかったのだが、I男はあとでS男をつねったらしい。私はI男には何も言えず、S男と二人でI男の気持ちについて話してみた。そのあとS男は、I男とごめんねの握手をして、遊びに誘ってあげていた。）

午後、I男はお遊戯室から一人戻って来ると、「こともがないていたよ」と、同じ組の子のことを私に教えに来てくれた。

他者に向かって、言葉で自分の気持ちを伝えることができないI男、そしてとても固くなってしまふ彼と共にいて、私も胸が苦しくなった。そう言えば、I男が他の子に「いいよ。」と答える以外のはなしをしているところをまだ見た覚えがなかった。他者に話しかけることができないということ、一体どのように考えていったらよいのだろうか。言葉でうまく表現することができないという以前に、声そのものを出せなくなってしまうという問題に、彼はぶつかっているように思われた。一般に、緊張すると声は出てこないものだが、そうだとすれば、I男は何に対してそれほど緊張してしま

うのだろうか。

しかしこの日の午後、「こどもがいないいたよ」と私のところにI男が教えに来てくれた時、私は彼の心がゆっくりと、お友達にも私にも開いてきていることを確信することができて、光が差したように嬉しく思った。

。六月十二日（水）

（……忙しく動き回っていて、K男の製作をなかなか手伝ってあげられなかった時のこと）I男が「せんせい、Kくんがよんでいるよ。」「そんなのあとにして、Kくんがせんせいをよんでいるよ」と、何度も私に言いに来る。K男の「手伝って欲しい」という待ちくたびれた気持ちを代弁して、自分は見ているだけなのにおもしろいと思った。今日はI男は一日何もしなかった。K男の製作のそばで、何やら作っているようで作っていなくて、フラフラしていた。

彼はK男の製作を見ているだけで、二人の間には目に見える交流はなかった。それなのに、K男を放っておけないでいるI男の行動から、I男には友達の気持ちを察する力が十分あって、友達を何とかしてあげたいと思う心も育っていることを、あらためて確認することができた。そして、自分から踏み出せるまでにはまだ時間がかかるかもしれないが、彼にはきつといつか友達ができるだろう、そして、その為の援助をしてあげるのが保育者としての私の役割であると改めて思うのである。

。六月二十日（木）

I男が「M君は？」と私によく聞きに来る。I男はM男を頼りにして、M男といると安心して
いるように見える。工作をしている最中、M男がやって来て、I男を遊戯室へ誘い、「先に行つて
待っているね。」と言つて出ていく。I男はしばらく作り続けて完成させたあと、どこに置いたら
よいかを私に尋ねてから、急いで飛び出して行く。私は心から行つてらっしゃいと声をかけた。少
ししてどうしているかと思ひ、遊戯室をのぞくと、組の男の子十人近くが駆け回っている。I男も
いる。このころ男の子の間に、突然逃げて仲間はずれにするという殺伐とした遊び方がはやって
いたので、私はこの時、友達同士の楽しい遊び方と思ひ、色鬼を始めてみた。I男は初めてみるよ
うな生き生きした表情で、M男の近くを駆け回っていた。I男が鬼になって皆に色を知らせる時、
私は手をつなぎながら励ましてみたけれども、I男は固くなって息づかいが荒くなり、とうとう声
が出せなかった。私が、彼から聞き出した色を皆に向かって代弁して、色鬼は再開する。I男はま
た生き生きした表情に戻つて、エネルギーに追いかけ始めた。

生き生きした表情のI男を見る時が多くなり、夏休みになつてしまふのが残念な学期末であつた
が、彼が友達に向かつて話す姿をとうとう見られないまま、長い休みに入った。そして、二学期の始
業式で久しぶりに顔を合わせた時、I男は再び固い表情をしていた。

新学期三日目、S男とM男が楽しそうに追いかけっこをしながら部屋に入つて来た時、それを見て
いたI男も、追いかけっこの中に入り始めた。一見すると一緒に遊んでいるように、楽しそうな表情

で近寄ったりあわてて離れたりしていたのだが、S男とM男が遊びの輪の中に彼を入れていないことが見えてきた時、私は胸が痛んだ。少しして、I男は一人で離れてしまった。他児から仲間として認めてもらっていなかった彼に、どうして学期の間気づけなかったのだろう。一緒に動き回っている時の楽しそうなI男の表情を思い出すと、いっそう胸が痛む。そして、自分の気持ちを声に出して伝えることのできない彼がぶつかっている問題を、記録を読み返しつづつ考えながら、今新たに、二学期を出発したところである。

I男に限らず、一人一人の子どもがぶつかっている問題をしっかりと捉えて、保育者として意識的、積極的にかかわっていかねばいけないと思いつつ、振り返ってみると全く未熟な自分を痛感する。しかし、どうしたらいいのか子どもと一緒にわからなくなりながら、日々一人一人とかかわることのできる短い時間を、とにかく精一杯生かしてみようと思つているところである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

